

---

# 日本新昔ばなし

亜李子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日本新昔ばなし

### 【コード】

N8933H

### 【作者名】

亜李子

### 【あらすじ】

昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました

## 鶴の恩返し・・・的なの？

昔々あるところに、心優しいおじいさんとおばあさんがおりました。

「じいさんや」

「なんだい、ばあさん？」

「ちよいと町まで暖炉の薪を買ってくるから家は任せたよ」

おばあさんはそういうとフリフリの赤いドレスを着て、おばあさんお気に入りの、シヤネルのカバンを持ち、首には大きな真珠のネックレスをしてうれしそうに家を出ました。

するとおじいさんは畑仕事をやりました。

「野菜は丁寧につくねーといけないからな」

そういつておじいさんは丁寧に野菜を見ていました。すると一匹の鶴の鳴き声がしておじいさんは声のする方へと走っていきました。

「くっそ、人間の罠にかかったぜ。ふざけんなよ！俺がただ人参をひとつとっただけでこれですか？なんなんだよ人間！もう、あゝムカつく！」

するとおじいさんがやってきました。

「大丈夫か鶴さん？」

「おう、じいさん。罠にかかったんだよ、助けてくれねーか？」  
するとおじいさんは心優しいのですぐに鶴を助けてあげました。

「わりーなじいさん。おかげで助かったわ。まあそのうちなんかするからじゃあな」

そういうと鶴は飛び立っていきました。

そしておじいさんはまた畑仕事にとりかかりました。

時はたち、夜。

「おじいさんや〜ただいま〜」

するとおばあさんは酒に酔ってフラフラで帰ってきました。

「おばあさんや、薪はどうしたんだい？」

「薪？なんだつけ？」

おじいさんは一瞬、殺意をおぼえました。でもおじいさんは心優しいので優しく、

「おばあさんは薪を買いにいくつていつて出て行ったんだよ」

「あゝそうじゃったそうじゃった。薪ね、薪。そんなこともいつてたっけかな」

そういうとおばあさんはみるみるうちに寝てしまいました。

そしておじいさんは深夜、おばあさんのいやな寝言をきいていなければなりませんでした。

「ドンペリ追加ゝお兄さんかっこいいね。やだ、奥様だなんて。もうシャンパンタワー追加」

おじいさんはこの寝言で眠れませんでした。

朝

今日はおばあさんと二人で朝から畑仕事をしていました。

「今日は暑いねゝばあさんや」

「そうだねゝこういうときはドンペリ、いやお茶がいいね」

「ばあさん今ドンペリつていわなかった？」

「いつてませんよおじいさん、ぼけたんじゃありません？」

おじいさんはちゃんとおばあさんがドンペリつていったことをわかっていました。

時がたち夕時。

コンコンとドアを叩く音が聞こえました。

「なんだろうね」

おじいさんがドアを開けたら、そこに立っていたのは、ドレッドヘアでグラサンをかけ、黒い皮ジャンにジーパンの姿の男がそこにはたっていた。

「あのさゝ、今日泊めてくんない？マジ今金なくてラブホとかためないんだよねゝだから汚い家だけでもとめてくんないのっていつて

るの。わかったかじいさん。

心優しいおじいさんは知らない男を仕方なく泊めてあげました。

「じゃあお兄さん、この部屋を使ってください」

「わかりやした〜おっと、そうだ。じいさん、絶対にのこくんじゃねーぞ。のざいたらしばくぞ」

男はそういい、部屋に入りました。

深夜〜

男の部屋がどうしても気になってしよーがないおじいさんはつい出来心で男の部屋をのぞいてしまいました。

そこに映っていたものは…男が知らない女と　　をやっていたのです。おじいさんは気まざくなり、そおーとドアを閉めおじいさんは就寝しました。

朝〜

「じいさん、世話になったわ。ありがとさん。お礼に、可愛い女の子のあて先をかいた紙おいといたから好きなときにハッスルしなよ！じいさん」

「するとその男はみるみるうちに、この前助けた鶴になりました。

「お前は！」

「なんかするっていったらどろ？じゃあな、じいさん」

すると鶴は飛び立ってしまいました。

## 桃から生まれた・・・前編

昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました。

おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川で洗濯をしにいきました。すると川の岸から、どんぶらこ、どんぶらここと大きな桃が流れてきました。おばあさんは何を思ったか知りませんが大きな桃をおじいさんと食べようとして桃を持ち帰ることにしました。

そしておじいさんが家に帰ってきました。おばあさんは大きな桃をおじいさんに見せて自慢しました。するとおじいさんは難しい顔をして、こういいました。

「おばあさんや、勝手に持って帰ってきたやいけないじゃないか。第一この桃は品種改良したか、もしくは宇宙人がもってきたものかもしれないじゃないか。そんな怪しい桃なんてたべられないよ」

おじいさんはそういい、山でとってきた大きな熊を焼いて食べ始めました。

それから一週間がたちました。

みるみるうちに桃は腐っていき虫がたかりはじめました。

「おじいさんや、この桃どうにかせんと」

「そうじゃなく、仕方ない。桃を小さく切って土に埋めよう」

おじいさんはそういって電動ノコギリをもってきて切り始めました。しかし桃が硬くきれません。するとおばあさんが怪しげな杖をもってきて呪文を唱えはじめました。

するとどうでしょう。みるみるうちに桃がぐだけでいけます。おじいさんは腰をぬかしておばあさんのほうをみました。するとおばあさんはこちらをむいてこういいました。

「魔法は二十歳の時にならいましたよ」

おじいさんはポカーンとしながらいまにも魂がぬけおちそうな顔をしました。

すると桃から不思議な光が出てきました。おじいさんとおばあさんは桃を覗き込むとなかから現れたのは、パソコンでアニメを見ているいかにも引きこもりな人が入っていました。  
…おじいさんとおばあさんは悩みました。  
いろいろ考えた末、引きこもりの人を桃から引きずりおろしました。するとおじいさんははつきりこういいました。  
「桃にひきこもってはかりじゃいかん。種子島の鬼を退治して来い」  
おじいさんがそういうと引きこもりの人がぶつぶつと小さい声で言い訳をいっていました。おじいさんはイライラしてきたか引きこもりの人を殴る蹴るなどの暴行をし警察へつかまりました。

一年後

おじいさんはようやく牢獄から開放しました。おじいさんは久しぶりの家に帰ってきました。

「おばあさんや、ただいま」

するとおじいさんが見たものとは…

おばあさんが若い男性と            や            や            をやっている  
ところ見てしまいました。

すると引きこもりの人（桃介）はおじいさんにこういいました。

「あの人はAKIRAとかいう人で人気No.1のホステスらしいよ」とおじいさんにいいました。おじいさんはなんだか悲しくなり家をでていきました。すると桃介は可愛そうにおもえたのかおじいさんの後を追いかけてきました。

「まってよおじいちゃん！」

必死に追いかけた末ようやくおじいさんに追いつきました。

「おじいちゃん、僕鬼退治にいつてくるよ。だからおじいちゃん、おばあちゃんを許してあげてよ。お願いだよ」

必死にお願いする桃介をみたおじいさんは優しく、桃介を抱いた。

次の日

「じゃあいつてくるよおじいちゃん、おばあちゃん」

「桃介気をつけていつてくるんだよ。鬼からもらった宝石は全部おばあちゃんに渡すんだよ」「おばあさんのいうことは無視して桃介、これをもつていきなさい」

するとおじいさんはポケットから団子のようなものを渡しました。

「おじいちゃん、これはなに？」

桃介がおじいさんにいうと、

「これはおじいちゃん特製きびDANGOじゃ。これをもつていけばきつとなにこの役にたつと思うよ」

おじいさんはにつこりしていいました。するとおばあさんが、

「きつとじゃなくて絶対の物渡せよ。そうしないと宝石いや鬼退治ができないじゃないか」

おじいさんは殺意を覚えました。しかし、桃介の出発の日ですからそこまで怒りませんでした。

そして、桃介の鬼退治の旅がはじまるうとしていた。

次回へ続く…

## 桃から生まれた・・・後編

桃介は一人、種子島を目指した。

「それにしても遠いな。俺の愛車のフェラーリでくればよかったよ」そう愚痴をこぼしながら種子島への道の森に行く。

すると、一匹のゴルゴ13が近づいてきた。

「そのDANGOをよこせ」

「なら、鬼退治手伝うか？」

「報酬はそのDANGOでいいな」

桃介は仲間が増えたことでも喜んで。

数分後

ゴルゴと二人で道を歩いていると、古い井戸に着きました。すると中から、貞子が出てきたのです。

：パキューン。一発の銃声が鳴り響きました。

「ゴルゴー！！！！」

「邪魔者は消す」

そっぴい井戸から離れました。

ピカチュウと遭遇した。

戦う？バググ？逃げる？捕まえる？

射殺。パキューンパキューン。

ピカチュウを殺した。経験地が200上がった。すばやさが1上がった。ポケモン図鑑に登録します。

「ゴルゴー！！！！。なにやってんだ。ピカチュウはゲットすべきだっただろ」

「大丈夫だ、耳だけはいできた」  
「怖いよ！」

そんなこんなで種子島についた。すると洞窟から大鬼が現れた。

「ゴルゴ！射殺するんだ」

「…」

「ゴルゴ？」

タッタッタッタッタ。

「ゴルゴが逃げたー！ー」

桃介は考えた。自分ひとりでは倒せない。いつそ鬼の仲間になるか？いやそれはいけない。ならどうする？

桃介はいろいろ考えた末、ようやく決断した。

「鬼様、ちよつとまっつてくれませんか？」

「…」

「最終兵器、テポドン！」

…

ドッカーン、バツコーンドカーン。

そして桃介は、鬼を退治しました。宝石はなく代わりにゴルゴを持ち帰りました。

おばあさんはゴルゴをみて大変気に入りました。おじいさんは泣いて、「よくやった」とほめてくれました。

しかしこんな楽しい日々が続くなんてことはないのです。桃介は、そう思いました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8933h/>

---

日本新昔ばなし

2010年10月11日15時44分発行